珠玉

初出『文學界』一九九〇年新年号

1990年2月15日　第1刷
1990年4月5日　第6刷

開高健…著者
豊田健次…発行者
株式会社文藝春秋…発行所
〒102東京都千代田区紀尾井町3-23
電話 03(265)1211(代)

精興社…本文印刷　凸版印刷…付物印刷
大口製本…製本　加藤製函…製函

万一、落丁乱丁のあった場合は
お取替いたします
©Takeshi Kaiko1990 Printed in Japan
ISBN4-16-311560-9
定価は函に表示してあります

珠玉

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

掌のなかの海……5
玩物喪志……43
一滴の光……117

装幀…菊地信義

掌のなかの海

もし、今、どこかの退屈しきった雑誌編集部からアンケート用紙が送られてきて、ロンドンについて何でもいいから忘れられないことを三つ書いて下さいと、あったとする。結局はその返事を書かないですませてしまうことになるだろうと思うが、何日間かは追憶を反芻してそこはかとなく愉しむことができるだろう、という気もする。三つめは何を書いてよいかわからないけれど、最初の二つはきまっている。これはうごかないところである。フィッシュンチップスと、夕方の酒場のオガ屑である。

〃フィッシュンチップス〃はタラとかカレイとか、白身の魚なら何でもいい、それを乱雑に叩き切って粉にまぶして油で揚げたというだけのものである。ポテトのフライといっしょにして新聞紙の三角袋につっこんでわたしてくれる。ごくざっかけな食べ物であって、

料理といえるほどのものではない。町角のスナックである。つまみ食いのオヤツみたいなものである。ずっと後になって東京で知りあったイギリス人から――この人はケンブリッジ出身だったが――あれは新聞紙に秘密があってエロ新聞に包んでもらうといつまでもホカホカと温かいけれど、『タイムズ』なんかだとたちまちさめてしまうというんです、というジョークを聞かされたことがある。シンプソンのローストビーフも食べたはずなのに肉も皿も思いだすことができず、こんなフィッシュンチップスの一包みが生きのこって、いつまでも忘れられない。歩道の人ごみを縫って歩きながらひときれずつつまみ食いしていると、雨がポツポツと沁みて新聞紙の活字がぼやけていったことや、酢が赤かったことや、くずれた白身がいい匂いと湯気をたてていたことなどが、ありありと思いだせるのである。

もう一つは酒場のオガ屑である。その酒場は通りがかりにふらりと入ったので、店の名も、通りの名も、何ひとつとして思いだすことができない。しかし、白と黒のダイヤ模様のタイル張りの床にオガ屑がまかれてあって、それがまるで雨のあとの森のようにいきい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

きと香りをたてていたことが忘れられない。酒場はあけたばかりなので客の数が少く、明るい灯がつき、ソーダの爽やかな音がひびき、ジンやウィスキーの香りがクッキリと縞をつくって漂っていた。一日が終ったというささやかだけれど切実な歓びが人の声に感じられ、オガ屑のしっとりした、新鮮な香りを、ああ、いいものだと感じ入ったものだった。これは酔っぱらいの吐く唾や痰をからめとるためで、昔からの習慣である。今の酔っぱらいは教養があるのでおとなしいけれど、昔の酔っぱらいは行儀が悪かったんだよ、という説を聞かされたことがある。東京の酔っぱらいは夜ふけの駅や電車では盛大だけれど、バーやビヤホールで唾とか痰とかを吐いているのはあまり見かけたことがないし、ちょっと思いだすこともできない。〝教養〟となると疑わしいかぎりだけれど、そういう光景はおぼえがない。これまでにわたり歩いたバーの数は数えようもおぼえようもないけれど、夕方にオガ屑をまいてたのは、たった一軒だけである。

三十年近くも昔のことになる。

その頃、小説家になって間もなくのことだから、どうやって暮していいものか、教えて

くれる人もなくて、途方に暮れていた。知人らしい知人もなく、先輩らしい先輩もいない。作品にしたいことが脳か心かにあって夜ふけに白い紙に向って専心しているときは何とかしのげるのだけれど、それが終ってしまって編集者に原稿をわたすと、いてもたってもいられなくなる。家にじっとしていられない。少年時代の後半期から持越しの、とらえようのない焦躁と不安が〆切日の翌日から流れこみ、こみあげ、小さな青い火で焙りにかかるのである。家を買った借金は月賦で返済しなければならず、妻と娘の一家三人のための生計は稼がねばならず、それはペン一本にたよるしかない。しかし、書きたいことは何もなくて、脳にのこっているのはどんよりした宿酔だけで、使い古しの歯磨きのチューブみたいな皺々の感触である。勉強部屋の窓に射す正当で、いかめしくて、しらちゃけた白昼光を見るだけでそわそわと立ちあがり、台所の妻に何やら口ごもり口ごもり弁解しつつ玄関へかけつけて靴をはく。言葉を見つけるためにと心にいい聞かせつつ靴をはくけれど、戸をあけるときには、きまって、ふと、スリが外出するときはこんな気持なのだろうか、と思いがかすめる。

半日がかりで新宿、渋谷、銀座と映画館をつぎつぎ立見して歩く。チカチカ煌めくこの暗闇だけが青い火をしばらく忘れるための応急診療所であった。凡作か秀作かは最後まで見なければわからないとしても、丹念に作ったものかどうかはカット一つを見るだけでわかるので、一カットか二カット見てから立見をつづけるか、空席をさがして坐りこむかをきめることにしてある。ときには満員をかきわけかきわけしてやっと空席を見つけて腰をおろしても青い火がきつすぎると、そそくさと立ちあがることもある。一つの映画を日を替えて三回も四回も見てやっと全部を見終ることがある。それが凡作なので映画館にその看板が出ている週は毎日その前を通過しつつ早く替ってくれないかと憎みつづけることもある。主役のスターはぼんくらの美男なのでどうでもいいけれど、ときどきしか顔を出さない脇役がどうにも渋くていいので、それだけを見たさに二度、三度かようこともある。シナリオは金言と名言の羅列だけれど、ときどき棘のように刺さってとれない科白に出会うこともあり、そんなときは何日間も平静でいられなくて膿みつづけることがある。

そうやって、ハシゴして歩くうちに、やっと黄昏になる。人ごみの暗い書斎から出て、

歩道に白昼光が消えているのを見ると、ホッとする。頭のなかは何軒も切れぎれに立見して覗いて歩いたために西部劇、寝室コメディー、密林冒険、古代活劇、スパイ・スリラー、ガラパゴス島の海藻を食べるウミトカゲなど、まるで玩具箱をひっくりかえしたみたいにひしめいていて、へとへとである。その疲弊が心の火を弱め、酸を中和してくれて、かえってなじめるのである。突然の黄昏が不安をおぼえるほど新鮮に感じられることもしばしばである。焦躁はけっして消えてくれないけれど、長い距離をてくてく歩いて酒場まで抱いていくことができる。夜は着古した、手放せないシャツのようにしみじみしていて、ありがたい。汐留の貨車駅の近くにあるその小さな酒場に入ると、凸凹の古い赤煉瓦の床にまいた松のオガ屑のしっとりした香りが鼻と肩にしみこんでくれる。物置小屋のように小さくてみじめな、薄暗い店で、酒棚には何本も瓶が並んでいないけれど、毎夜毎夜しこしこと雑巾で拭きこんだ、傷だらけのカウンターに肘をのせると、まるで古い革のようにしっかりと、しっくりと、支えてくれる。その吸収ぶりとオガ屑の匂いだけに誘われてほとんど毎夜のようにかようのである。なぜ男が一軒の酒場にかよいつめるか。説明は言葉で

できるか、できないかのようなものだが、しいてあげれば、ストゥールのすわり心地と、カウンターが肘をどう吸いとってくれるか、だろうか。それが信号の第一触である。最初の一瞥である。

「どう？」

「あけたばかり」

「ひま？」

「ひま」

「高田先生は？」

「このところ見えないね」

バーテンダーの内村は初老の薄髪の頭を傾けてマーティニを作りにかかる。氷を白のヴェルモットで洗い、お余りをいさぎよく捨てる。ヴェルモットの薄膜で氷片を包むという形である。それを手早く水夫用のどっしりしたグラスに入れ、あらかじめ瓶ごと冷蔵庫で冷やしてあったジンを注ぎ、レモンの一片をひねってあるかないかぐらいの香りをつける。

すると、研ぎたてのナイフの刃のような一杯になる。一日の後味をしみじみと聞ける一杯になる。

「オガ屑は松の匂いがいいな」

「でしょう?」

「松の匂いがいいね、爽やかで」

「いろいろとやってみたんですがね。檜とか、杉とか。それぞれ持味があっていいんですが、ちょっと時間がたつと、もたれてくるんですな。いい匂いがかえってくどくて邪魔に思えてくる。しかし、松なら消えてくれる。これは酒場の、何というか、床まき香水。今風ならトイレット・ウォーター。そんなもんですな」

「森のなかで酒を飲んでるみたいだよ」

「そう仰言って頂けるとありがたいッ」

ネズミの巣のような小さな薄暗がりで二人でぼそぼそと話しあう。話しながら内村は皿を洗ったり、酒瓶を拭ったり、小忙しい。毎夜おなじ言葉を交わしあっているのだが、気

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.